

平成 28 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

校訓である「自主自律」「和親協力」を背景に、変化の激しい時代に対応できる人材を育成し、生徒・教員がともにチャレンジする学校をめざす

- 1、基礎学力の定着を背景に、広い教養を身につけた上で、健全な議論や思考ができる人材を育成する。
- 2、急速に進むグローバル化に対応する英語教育を根幹とした新しい国際教育を研究・開発・展開する。
- 3、自由な校風と自主自律・和親協力を背景に、学習と部活・行事の両立をはかる。

2 中期的目標

1、学力の向上

- (1) 学習習慣の定着を図る。

- ア. 高校生として必要な基礎学力の定着とその方法を認識するためのシステムの開発を進める。
- イ. 学年・教科の壁を越えた学校としてのスタンダードを開発し、明確に示す。

※効果検証 学力生活実態調査の結果： 平成 26 年度…入学時 A3 以上が約 200 名→高 3 のスタート段階が約 20 名
平成 29 年度…入学時 A3 以上が約 200 名→高 3 のスタート段階が約 100 名を維持

- (2) 教員育成のための研修・勉強会を実施し、統計資料を担保とした効果検証を行い、フィードバックを厳しく行う。

- ア. 上記 (1) を実現するために、検討された内容を教科横断的な研修・勉強会を通じて、検討・定着を進める。
- イ. 検討された上記 (1) について生徒アンケートや模擬試験などの結果から効果検証を行い、フィードバックを行う。

※効果検証 授業満足度について、保護者アンケートにおける「よくあてはまる」を平成 26 年度 8%→平成 29 年度 20%

- (3) 上記を実現するために必要な学校組織の在り方や施設・設備の整備を進める。

- ア. 上記 (1) (2) を達成するために、必要な学校組織の再編を進める。
- イ. 特にスクラップアンドビルドを認識し、スマートな組織・業務運営を図り、教員が生徒とかかわれる時間を確保する。

2、グローバル時代に対応する教育システムの開発

- (1) TOEFL iBT を中心とした英語教育の改革を行う。

- ア. 「骨太の英語力養成事業」を活用し、新しい英語教育システムを開発する。
- イ. 上記事業を活用し、外部との連携を図り、生徒とともに本校教員も学び続ける。
- ウ. 上記事業を活用し、TOEFL iBT を受け、右の成果を出す。

※効果検証 (1)ウ	TOEFL iBT 80 点	TOEFL iBT 60 点	TOEFL iBT 40 点	受検者数
平成 28 年度	2 名	10 名	20 名	80 名
平成 29 年度	4 名	15 名	25 名	80 名
平成 30 年度	6 名	20 名	30 名	80 名

- (2) 上記 (1) の実現に必要なスキルであるロジカル・クリティカルシンキングを理解・実践する。

- ア. スキルを学ぶための思考ツールの開発を行う。
- イ. 開発したツールを使用するための授業方法として、まずは日本語のディベートやプレゼンテーションなどを行う。

- (3) 海外留学生の受け入れ態勢を整備し、海外語学研修や修学旅行などの機会を充実させる。

- ア. より多くの留学生に来訪を促し、本校生徒との交流の機会を増やすシステムを開発する。
- イ. 海外語学研修や修学旅行については、事前事後の学習を通じて実感を通じた理解を進める。

※効果検証 ア：平成 27 年度 1 名→平成 30 年度 8 名

- (4) 国際科（グローバル科）開設にあたり、さらなる英語教育の充実を図る。

- ア. TOEFL iBT 以外の外部評価として英語学力調査を導入する。
- イ. 「グローバル人材育成委員会」を中心に、箕面高校ならではのカリキュラム等を構築する。

3、進路・生徒指導の強化

- (1) 進路実現のために必要なシステムの開発を行う。

- ア. 国公立大学への進学実績を伸ばす。
- イ. 上記 2 (1) を受け、国内の国際系大学※への進学のシステムを構築する。
- ウ. 上記 2 (1) を受け、海外大学への進学をめざすシステムを構築する。

※国内の国際系大学…大阪大学外国語学部・早稲田大学国際教養・上智大学・国際教養大学・国際基督教大学などをさす。

※効果検証 ア：平成 27 年度 30 名を平成 30 年度 60 名にする。 イ：平成 27 年度 1 名を平成 30 年度 10 名にする。

ウ：平成 27 年度 1 名を平成 30 年 10 名にする。

- (2) 生徒主体の部活動・行事の運営と学習との両立を進める。

- ア. 基礎的な生活習慣の定着を進める。
- イ. 生徒会を中心とした、自主的な活動を推進する。

※効果検証 ア：年間遅刻者数を平成 27 年度約 5000 件を、平成 30 年度には約 3000 件まで減らす。

- (3) 地域との連携を意識し、様々な機会を通じて、情報発信と協働を行う。

- ア. 部活動を中心に地域のイベントへの協力などを進める。
- イ. 本校の英語教育の発展のため、そして地域の英語教育の発展のために、人材の相互交流を進める。
- ウ. ホームページや広報素材を充実させ、本校を希望する方々や同窓生の方々への理解を充実させる。

4、学校経営推進費事業の活用

- (1) 平成 26・27・28 年度の上記事業を活用して、以下の事項に取り組む。

- ア. インタラクティブな授業展開ができることを目的に、校内の環境整備を図るとともに、新しいメソッドの開発を進める。
- イ. 国際科（グローバル科）設置に伴い職員室の改修を図る。
- ウ. 自習室・進路指導室の機能向上を図るとともに、教職用 ICT 機器の充実と研修体制の確立を図る。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 28 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
例年と変わらず、高評価が続いているが、授業満足度が低い。次年度においては、満足度が低い原因を具体的に探るとともに、各教科における3年間の指導計画を作成してもらうべく、まずは英語科から骨太の英語力養成事業のまとめを兼ねて、議論を始め、一つのパッケージとして整理し、まとめていく。また、その内容を他教科やすべての活動にもひろげていく。	<p>第1回【平成28年5月28日実施】 ダイバーシティがキーワード。LGBTの件もあるので、生徒の視野を広げてほしい。</p> <p>第2回【平成28年11月19日実施】 図書室の改修は、非常に良い教育効果を生んでいると思う。稼働率がアップしていくと思えるので、その対応をうまくしていただきたい。</p> <p>第3回【平成29年2月4日実施】 特設レッスンの生徒の満足度が高いので、その内容を通常授業の中にひろげてほしい。また、グローバル（国際教養）科と普通科の指導内容の均質化を進めてほしい。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
学力の向上	(1) 学習スタンダードを作るための基盤整備 (2) 教員育成のための研修・勉強会の立ち上げと整備 (3) 学校組織の整備	(1) 学習スタンダードを整備するための素材集めを始める。 (2) 上記(1)を遂行するために、新採者育成を含めた若手教員育成勉強会を5月より首席を核に、教科横断的に毎月1回の頻度で実施する。また、授業アンケート(7、12月)の課題把握と成果検証を明確に行い、フィードバックを明確にする。 (3) 教員育成勉強会とともに、「骨太英語プロジェクト」の遂行に向けて、学校組織における分掌・委員会を整備し、人事計画については中長期の視点に立った人材配置を行う。	(1) 本年度中にスタンダードの骨子の完成をめざす。 (2) 以下の内容の完成と遂行をめざす。 ・勉強会方針の完成 ・新採者人材育成ルートマップの完成 ・授業アンケートの保護者アンケートにおける「よくあてはまる」8%→20% (3) 本校の学校教育自己診断における全般に関する質問で肯定感85%→90%以上(生徒) 教職員の学校組織に関する質問の肯定感72%→75%(教職員)	(1) 骨子作成に至らず(△) (2) 勉強会方針不作成(△) ルートマップ作成途中(△) 学校教育自己診断12月実施 保護者アンケートにおける「よくあてはまる」(H27)19.5%→(H28)19.8%(○) (3) 生徒83.1%(△) 教員62.0%(△) 教員の提出率50%増加(◎) (前年度比)
グローバル時代に対応する教育システムの開発	(1) TOEFL iBTを中心とした英語教育の改革を行う。 (2) 上記(1)の実現に必要なスキルであるリテラシー・クリティカル・シンキングを理解・実践する。 (3) 海外留学生の受入態勢を整備し、海外語学研修や修学旅行の機会を充実させる。 (4) 国際科(グローバル科)開設にあたり、さらなる英語教育の充実を図る。	(1) 国際教養部を中心に、TOEFL iBTプロジェクトチームを発足し、現状分析と課題の把握、今後の方向性と課題解決策の策定作業に取り組む。また、「骨太英語プロジェクト」に関して、先行実施として、特設レッスンやiBT模試などを受験させ、成果検証を実施する。 (2) 具体的な思考ツールの開発については、他校や企業などで使われているノウハウを吸収・研究し、本校にあったカリキュラムを構築する。 (3) 「海外留学生受入方針」を明確に整備し、具体的な教育目標と数値目標を設定する。また、海外語学研修については、内容を再検討し、「骨太プロジェクト」との連動を整備する。 (4) ア.成果指標の新たなツールとして英語学力調査を新入生全員に受検させる。 イ.「グローバル科設置準備委員会」を中心に、箕面高校ならではのカリキュラム等を構築する。	(1) 以下の内容の完成と遂行をめざす。 ・TOEFLiBTのスコアについて 平成28年度 Score60↑…6名(H27;4) Score40↑…15名(H27;14) ・骨太英語について「箕面シラバス」の骨子の完成 (2) 上記(1)の2つめの内容と重複する。 (3) 以下の遂行をめざす。 ・留学生の受入数 平成28年3名(H27;1) ・海外語学研修の更なる内容検討と整備 (4) 以下の遂行をめざす。 ア.英語学力調査全員受検 ・Basic(660)で 520以上60名(H27;56) ・Advanced(810)で 610以上20名(H27;14) 520以上80名(H27;72) イ.「21世紀型能力」カリキュラムを開発し、周知する。(年内)	(1) TOEFL iBT チャレンジ 80名受検(3月) Score60↑…5名(○) Score40↑…20名(◎) 「箕面シラバス」作成途中(△) (3) 留学生受入数 平成28年度0名(△) 海外語学研修実施(2回) 国内でのEnglish Camp実施 (2回)(◎) (4) GTEC1・2年全員受検(7月) ・Basic(660)で 520以上47名(△) ・Advanced(810)で 610以上14名(○) 520以上74名(○) ・グローバル人材育成委員会にて 原案完成(○)
進路・生徒指導の強化	(1) 進路実現のために必要なシステムの開発を行う。 (2) 生徒主体の部活動・行事の運営と学習との両立を進める。 (3) 地域との連携を意識し、様々な機会を通じて、情報発信と協働を行う。	(1) 学年・教科での認識の差をできるだけ少なくするために、進路指導室を中心に定期的な研修などを行う。 (2) 生徒会を中心とし、今まで構築してきた生徒主体の部活動・行事運営に関して、より発展的でシステム化されたものを検討していく。 (3) 国際教養部や骨太英語、部活動などを通じ、地域との連携を整備、強化していく。特にホームページに関しては、広報推進委員会(仮称)を立ち上げ、組織的な情報発信を行う。また、校内・校外美化の継続的な実施と地域との連携を進めていく。	(1) 以下の内容の完成と遂行をめざす。 ・国公立大学合格者平成27年度30名→40名 ・国内の国際系大学 平成27年度1名→5名 ・海外大学への進学 平成27年度3名→5名 (2) 以下の内容の完成と遂行をめざす。 ・箕面高校進路指導システムの構築と徹底。遅刻者数5000名→4500名。 ・生徒会行事における基本方針の作成 (3) 以下の内容の完成と遂行をめざす。 ・ホームページのアクセス数を増やす。(参考:府立他校のアクセス数約110件/1日程度→約200件) ・学校教育自己診断の保護者アンケートにおけるホームページ閲覧に関する質問での肯定率31%→50%	(1) 国公立大学合格52名(◎) 国際系大学合格16名(◎) 海外大学進学予定5名(○) (2) ・遅刻者数 5050名(H28 5000名) 4%減(○) 注:生徒数3%増(H27→H28) ・基本方針継続検討中(○) (3) ・ホームページアクセス数 ページビュー:約900件/日(◎) ・保護者31%(△)
学校経営推進費の活用	(1) 平成26・27・28年度の上記事業を活用して、以下の事項に取り組む。	ア.インタラクティブな授業展開ができることを目的に、校内の環境整備を図るとともに、新しいメソッドの開発を進める。 イ.国際科(グローバル科)設置に伴い職員室の改修を図る。 ウ.自習室・進路指導室の機能向上を図るとともに、教職員用ICT機器の充実と研修体制の確立を図る。	・左記の内容に関して、上記3項目と連動させることにより、数値の改善を進める。特に、「学力の向上」の教職員の学校組織に関する肯定感の改善や、「進路・生徒指導の強化」とは密接に関係しているものと位置づけ積極的に推進していく。 ・海外トップ大学への現役合格0名→2名	・教員 学習指導の肯定感73%(△) H27…84.5% 生徒指導・進路指導 の肯定感74.3%(○) H27…77.1% ・現役合格2名(○)